

高大連携教育における生徒の内発的動機付けに関する研究

森 永 武 人 (神戸学院大学附属高等学校)

1. はじめに

本校はもともと女子高校であったが、12年前に神戸学院大学の附属高校として新たなスタートを切った。附属高校の立ち上げ以来、2年生時に半年間かけて行われる高大連携教育は本校の教育活動の柱である。また、高大連携教育の取り組みについては全国的な動きにもなっており、その成果については様々な形で論じられている。今回の研究では、主に本校で展開している高大連携教育を概観しながら、高大連携教育そのものが生徒の進路決定やとりわけ普段の学習活動などといった『内発的動機付け』に対してどのような影響を及ぼしているかについてアンケート結果を踏まえて論証することを目的としている。さらに、これからの高大連携教育の在り方についての提言になればと考えている。

2. 高大連携教育について

もともと高大連携教育は、中央教育審議会が1999（平成11）年に出した答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」の中で、高校教育から大学教育への円滑な移行を図るために提言したもので、当初は、大学教員が高校に来て、講演することなどが主体でありそれが次第に、大学教員が高校に出向いて大学レベルの内容を教える「出前授業」や、大学による高校生向けの特別講座の開講などに発展し、都道府県によっては、教育委員会と大学が協定を結び、高校生が大学で一部の授業を学べるようにして、それを高校の単位として認めるという取り組みを行うところもある。本校では、附属高校としてスタートと同時に、生徒は週に1回（2年時後期）大学に出向き、午前中は通常の授業を受け、午後からは大学の様々な学部の先生から直接講義を受けることにより、生徒の進路選択に役立てる高大連携教育を展開している。

また、薬学部への進学を目指している生徒（3年時）に対しては、上記の連携教育とは別に神戸学院大学に入学した学生対象の初年次教育のひとつである、専門基礎教育「薬学への招待」を受講することができる。以下、本校での取り組み状況を概観したい。

3. 本校における高大連携教育の状況

1) 神戸学院大学での高大連携教育

2年生全員が対象の高大連携教育で、毎週月曜日（半年間）大学に通い午前中は高校の授業を受け、午後からは様々な学部の教授から講義を受けることによって、3年次での学部決定を確実なものにする

ることにより、大学教育の早期体験及び大学進学時におけるミスマッチを防ぐことを目的としている。

a) 受講アンケート

- 高大連携授業を受講する前から希望学部(学科)は決まっていた。
①決まっていた30% ②ほぼ決まっていた33% ③決まっていなかった30% ④わからない7%
- 高大連携授業は進路希望(他大学を含め)を考える参考になりましたか。
①そう思う18% ②ややそう思う54% ③あまり思わない22% ④全く思わない6%
- 現時点での進路希望(学部)について ⑨の場合は学部名()
①薬学部14% ②栄養学部4% ③総合リハビリテーション学部9% ④法学部7%
⑤経済学部7% ⑥経営学部9% ⑦人文学部20% ⑧現代社会学部2% ⑨その他28%
- 高大連携授業では高校にはない分野の授業や専門的な授業を受けられた。
①そう思う42% ②ややそう思う43% ③あまり思わない12% ④全く思わない3%
- 大学での授業は難しかったが、興味を持って受講できた。
①そう思う25% ②ややそう思う52% ③あまり思わない17% ④全く思わない6%
- 授業が難しくほとんど理解できなかった。
①そう思う5% ②ややそう思う24% ③あまり思わない56% ④全く思わない15%
- 高校でのこれからの学習について
①頑張ろうと思う76% ②少しは頑張ろうと思う24% ③あまり頑張ろうとは思わない0%
④全く頑張ろうとは思わない0%
- 授業の中で、特に興味深かったことや印象に残ったことは何ですか？

- ・法学部の戦争で兵士として利用される子どもたちの話
- ・経済学部のアジアと深く関わって発展した日本経済の話
- ・地震の事について学んだ防災教育では、生徒参加型の授業だったから楽しかった。

- その他、授業を通じて感じたことを自由に書いてください。

- ・法学部にいきたいと思っていたけど、今回の講義を聞いて経済学部にも興味を持ちました。
- ・大学の進路についてよく考えさせられました。
- ・今までの学習とは違うなと思った。
- ・大学での授業(90分)は長かったので、いかに集中してやるかが重要だと思いました。
- ・興味ある分野を掘り下げていて、すごいと思いました。

2) 神戸学院大学「薬学への招待」に関わる報告

神戸学院大学において大学1年生を対象とした専門科目『薬学への招待』(薬学部)に本校の生徒(3年時)が聴講生の形で参加。今のところ、単位認定まではされてはいない。

講義内容		
1	薬とは？	薬学とはどのような学問かを概説できる 薬とは何かを概説できる
2	薬の歴史	薬の発見の歴史を具体例を挙げて説明できる
3	薬局方	薬局方が必要な理由について説明できる
4	体の中の薬	投与された薬物の体内動態について概説できる

5	創薬	医薬品開発のプロセスについて概説できる
6	製薬から流通まで	化学物質が医薬品として治療に使用されるまでの流れを概説できる
7	いろいろな剤形	チーム医療の中の薬剤師の役割について概説できる
8	生物学的製剤	生物学的製剤の発見の歴史を、具体例を挙げて説明できる
9	先進医療と医薬品	医療に進歩に伴う治療の変遷について概観できる
10	麻薬と覚せい剤	麻薬、大麻、覚せい剤などを乱用することによる健康への影響について
11	公衆衛生	疾病の予防および健康管理における薬剤師の役割について概観できる
12	薬剤師の歴史	薬学の歴史的な流れと医療において薬学が果たしてきた役割を概観
13	医薬品の適正使用	医薬品の適正使用における薬剤師の役割について概観できる
14	薬剤師の活動分野	薬剤師の活動分野(医療機関、製薬企業、衛生行政)について概観できる

a) 受講アンケート

1. 高校にはない分野の授業や専門的な授業を受けられた。
①そう思う75% ②ややそう思う25% ③あまり思わない0% ④全く思わない0%
2. 高校での授業の理解に役立った
①そう思う12.5% ②ややそう思う62.5% ③あまり思わない25% ④全く思わない0%
3. 難しかったが授業は興味を持って受講できた。
①そう思う87.5% ②ややそう思う12.5% ③あまり思わない0% ④全く思わない0%
4. 進路を考える参考になった。
①そう思う62.5% ②ややそう思う25% ③あまり思わない12.5% ④全く思わない0%
5. 授業が難しくほとんど理解できなかった。
①そう思う12.5% ②ややそう思う37.5% ③あまり思わない50% ④全く思わない0%
6. 授業を通じて感じたことを自由に書いてください。

- ・この講義を受け、より一層薬剤師を目指そうと思いました。
- ・大学生と一緒に授業を受けることは緊張したけど、進路だけでなく将来のことをよく考える機会になって良かった。また、広い視野で薬のことを知れてとても良い経験になったと思います。
- ・大学の雰囲気はわかってよかったです。
- ・この授業を受けて、薬学の勉強内容や雰囲気がとても良く分かりました。また、大学生と共に授業を聞くと、私も次は大学生としてこの授業を受けたいと思ったことや自分の夢に対して強く実感することができて本当に良かったです。

4. アンケート調査及び、高大連携教育実施校調査の結果から

アンケート調査の結果では、高大連携教育を受講する前において進路希望が「明確でなかった」或いは、「わからなかった」と答えた生徒のほとんどが、高大連携教育が進路希望を決定する上において確かな参考になっていることが伺える。同時に、事後の学習に対する取り組みについても、多くの生徒が「頑張ろうと思う」と回答していることから、高大連携教育そのものが学習に対する動機付け

となっているといえる。また、授業の理解度についても、全く理解できていない生徒はほとんどなく、高校生であっても高等教育を十分に受けることができることを表している。

また、他校において高大連携教育を実施している学校での調査では、東京工業大学附属高等学校及び、お茶の水女子中高等学校にご協力いただき、実施状況やその教育的効果について話を伺うことができた。そのどちらの学校にも共通していえることは、高大連携教育での学びというものが、大学や学部選びをする際に大きな影響を与えていることや、生徒の学習に対する内発的動機付けに対して優位に働いていることが確認された。

最後に、昭和女子大学昭和中高等学校では、五修生制度という取り組みを行っており、この制度は中高6年間の学修を5年間で修了し、6年目つまり高校3年次に生徒は高校に籍を置きながら、大学1年生と同じカリキュラムに基づいて大学生活をスタートさせる取り組みを20数年前から行っている。その中でも特徴的なことは、大学での成績状況において、複数の生徒が成績上位者の中にいたり、また成績上位者に与えられる奨学金の対象になっていることがあげられる。このことから、高校生であっても高等教育を十分に受けることができることに加えて、通常よりも1年早く大学を卒業することができるのと同時に、1年早く大学院などに進学することも可能になるなどといった先進的な取り組みが行われている。

以上のとおり、高大連携教育の取り組みについて、様々な方向から検証を行ってきた。それぞれの調査結果から、生徒達は高大連携教育とはいえ、実際の大学教育を正面から受け止め、それぞれの進路に役立てようとする姿勢が伺える。また、生徒達が大学での学びや研究に直接関わることによって、高校の既存の教科にも大きく関心が高まっていることも伺える。今後、高大連携の取り組みをうまく活用し機能させてゆくことは、高校教育をはじめ、大学教育への大きな懸け橋として位置づけられるのではないかと考える。さらに今後の取り組みとして、高校での修得単位を高校での卒業単位として認めたり、大学に進学した際、その卒業単位として認定される方策を考えてゆく必要性があること、また今後多くの高等学校において高大連携教育が教育活動に組み込まれるためにも、校務分掌の中での明確な位置付けも必要になってくると考える。

5. おわりに

本校では、これまで12年間にわたり高大連携教育を本校の教育の柱として展開してきたが、このような形で調査研究することはなかった。今回の調査研究を通じて、その教育的効果を改めて確認することができた。同時に、課題などについても今後の教育活動に還元できればと考えている。また、他校に対しても高大連携教育の取り組みが何らかの参考になればと考えている。

さらに、今後の高大連携教育を考えるにあたり、「キャリア教育」が必須化になる動きにも注視しながら、高大連携教育を「総合的な学習の時間」の一環として捉えるのでなく、その取り組みを学校教育の中で明確に位置づけしていくことが求められる。

最後に、今回の研究を行うにあたりご協力いただいた東京工業大学附属科学技術高等学校 副校長 益田研一氏、お茶の水女子大学附属高等学校 萩原万紀子氏、そして勤務校である神戸学院大学附属高等学校に対して感謝申し上げます。